

1 大学の理念・目的および学部、大学院等の使命・目的・教育目標

【目標】

建学の精神および基本理念に基づき、時代や社会の要請に応じた教育を行い、いずれの学部・学科・研究科においても、専門分野に関わる識見と幅広い教養とを身につけさせ、多様な進路に柔軟に対応できるバランスのとれた女性を社会に送り出すことを目標とする。

また、教職員や学生が新島襄の想いや歴史を支えてきた諸先輩方の想いを伝えるための工夫をする必要がある。同志社教育とはなにか、同志社女子大学とはなにか、という問いに対する答えを常に教職員が考え続けることこそが重要である。

本学の建学の精神および基本理念をさらに内外に周知し、理解を図るため、同志社女子大学のブランド構築について検討し、「同志社女子大学ブランド」を確立する必要がある。

（１）歴史と特色

（ア）同志社女子大学のはじまり

同志社女子大学の歴史は、良心教育を柱とするキリスト教の教育理念に基づく人格教育、リベラル・アーツ教育、国際主義教育を核として、1876年、京都御苑内柳原邸での新島襄、J.D.ディヴィス、A.J.スタークウェザー等による女子塾開設に始まる。翌年には同志社社長・新島襄が京都府に開業を願い出、同志社分校女紅場として1877年4月21日に発足したのち、同年9月に同志社女学校と改称。新島襄の妻の八重も初期には教鞭をとっていた。

一方、同志社大学の前身である同志社英学校は前年1875年に創設されており、新島襄は自身が学んだアメリカ東部のアーモスト大学や、岩倉使節団との欧米視察の経験から、欧米文化発展の原動力がキリスト教と教育にあることを確信していた。同志社英学校に続く女学校設立の計画に協力したのがJ.D.ディヴィスと山本覚馬であり、そのために婦人宣教師の派遣をアメリカン・ボード（キリスト教伝道局の一つ）に求め続け、その要請に応じて京都入りしたのがA.J.スタークウェザーであり、校舎の建設費用6,000ドルも、すべてアメリカのクリスチャン女性から寄付されたものである。つまり、同志社女子大学のはじまりは内外の女性の力ではじめられたといえる。

当時の京都には封建時代の影響が根強く残り、女学校の基礎が形作られるまでには多くの困難があり、婦人宣教師たちは、そうした困難の一つひとつを行動力に満ちた犠牲的精神によって克服していった。そして、彼女たちの精神は今も本学の教育理念の中に息づいており、本学が育成をめざす「他者を思いやる心と自律精神を身につけ、国際社会で活躍できる女性」の原型となっている。

その後、同志社女学校は1892年6月に同志社女学校専門部、1930年に同志社女子専門学校となった。

（イ）同志社女子専門学校から同志社女子大学へ

1949年の学制改革により、同志社女子専門学校を廃し、創立の理念を継承した形で、英文学、食物学、音楽の3専攻からなる学芸学部単学部の同志社女子大学となった。この時期こそ、敗戦による明治維新以来の日本のシステムの崩壊後、GHQ（連合軍総司令部）の指導のもと、日本の社会が大変革を遂げた時期である。この社会的変革期に、本学はどのような選択をしていたのか、「同志社女子大学 125 周年」より抜粋する。

1）同志社女子専門学校の選択

日本国政府は GHQ（連合軍総司令部）の指導のもとに、1947 年 3 月 31 日に新たに教育基本法を公布した。それは長い間日本の教育を支配していた男女別学の理念ではなく、「教育において、男女共学は認められなければならない」との基本理念に基づくものであった。

しかし、戦後の民主主義思想を背景にして、男女の大学教育における機会均等とともに、女子の教育機会を拡大・強化する必要があるとの認識が高まり、女子大学および女子短期大学も日本各地に創設された。また、戦前から女子専門学校として、女子の高等教育に力を注いできた学校の中には、男尊女卑思想が根強く残っている日本的風土の中で、これまでの役割をいっそう強化するために、あえて女子大学のままだに留まる学校も少なくなかった。

このことに関しての同志社女子専門学校の選択は、他の女子専門学校ほど容易ではなかった。なぜなら、同じ学園内の同志社の中には、時代に先駆けて女子の入学を認めていた同志社大学があり、それが総合大学として共学制を採用することは当然のことであったからである。そこで女子専門学校当局者に示された道は、同志社大学の一学部吸収合併されるか、女子短大にするか、あるいは同志社大学とは違った特徴を持つ女子大学として存続するかのいずれかであった。

同志社女子専門学校の選択は第3番目であった。同志社の長い女子教育の伝統の中で、創立時より同志社女学校を精神的・物質的に援助してくれたアメリカの友人たちに対する責任があったからであり、これまで日本の女子教育を支えてきたとの自負があったからである。

2）リベラル・アーツ・カレッジとしての新しい出発

新しい出発に際して重要な問題となったのは、「同志社大学と違って特殊な意味を持つ女子大学とは、いったいどんな大学であり得るのか」ということであった。そして「女子大学設置準備委員会」が構成され、特色ある女子大学のさまざまな可能性が探られた。

その結果、スタートすることになったのがリベラル・アーツ教育を重視する大学であり、片桐哲はその学部を学芸学部とした。英語名も Doshisha Women's College of Liberal Arts と決まった。リベラル・アーツの大学というのは、「一つの学問を余り深く掘り下げないで、広く履修した上で、主要科目一科目を選んで専門とする」というもので、これまでの下地のあった英文学・家政学のほかに、新しく社会学と音楽専攻が構想された。

3) 四専攻の設置理由

それぞれの専攻を設けた理由は「同志社女子大学設置認可申請書」(1948年7月26日付)の中で以下のように記されている。

(英文学)

同志社全体としても同志社女子専門学校としても久しき歴史と伝統を有して居り、特に同志社大学と密接な提携をすることにより、教授・講座・図書設備等を利用することができる特徴があり、今後愈々広く深く研究されようとしている斯学に対する有能な人物を輩出することを期している。

(音楽)

本大学に於いて音楽は特殊職能教育を与えることを主眼とはせず音楽を一教養として課することを目的としている。従来同志社は音楽を重んじ学生会等に於いても音楽の研究団体が多いばかりでなく、女子部に於いて創立以来内外の専門教授を擁し声楽及び器楽の指導に力を注いでおり、幾多の音楽家及音楽的教養に富める女性を輩出した。設備としても昭和十六年以降我国に於いて最も優秀なパイプオルガンを有し此数年間定期演奏会等に於いて社会に貢献している所も多い。

(社会学)

将来各種の社会事業が愈々重要視される時に当り従来この方面に幾多の指導者を輩出して来た同志社に於いて本大学は同志社大学との密接な連携により幾多の便益を得つつ女子の指導者の輩出の為堅実な発達を期し得るのである。

(食物学)

従来同志社女子専門学校に於いて家政科中食物学は重要な部門を占めていた。従って現在女子専門学校に有する教授設備等はそのまま大学の有力な部分として転換せしめることが出来るのであり、将来この専攻に更に児童学専攻を加える事によって女子大学としての特色を愈々発揮せしめる計画である。

同申請書の中には、将来計画として、上記の児童学専攻のほかに、1954年度より図書館学専攻を設けること、さらに学科課程に関することとしては、1960年度より音楽専攻部門中にパイプオルガン科を加えることも記されている。

残念ながら、社会学専攻については「社会学専門の博士号を持った教授がいないという理由」によって認可されず、一学部三専攻としてスタートした。

4) 同志社女子大学の基本理念

「同志社女子大学設置申請書」の冒頭には、大学設置の目的が以下のとおり明記されている。「本大学は教育基本法及び学校教育法に基き学芸の大学として学術を教授研究すると共に明確に思考し有効に思想を發表し諸種の価値を判断識別する能力を育成しあわせて基督教の理想に遵ひ円満な人格を涵養すると共に国際的民主主義社会に於いて建設的に且つ責任をもって生活し得る女性の養成を目的とする。」要するに、学問研究だけでなく、広い視野に立って物事を思考しかつ的確な判断ができる女性、根底にはキリスト教の愛の精神を身につけ、国際

社会の中で立派にその役割を果たすことのできる女性を育成するということである。

ここには、明治期以来の同志社教育の伝統であるキリスト教の精神による人格教育、良心教育を受け継ぎ、戦争の時代を乗り越えて国際社会で活躍する女性を育成していこうとする熱意があふれているとともに本学の性格をリベラル・アーツの大学とすることを表明している。学則にある本学の基本理念であるキリスト教主義、国際主義、リベラル・アーツ教育がこの時代を背景にして明確に再確認されているのである。

個々のカリキュラムの特色としては『ヒューマン・リレーションズ（人間関係）』を1年生におくこと、当時は女性としてだれでも知らなければならぬと考えられていた家事について幅広く学ぶために『家政学概論（総合科目）』を必修とすること、また制度としては主専攻・副専攻を設けることなどが合意された。主専攻と副専攻の課程を設けたのは、せまく専門に偏らず、広い学問領域において、真に人間を自由にならしめる教養の教育が意図されたからである。『ヒューマン・リレーションズ（人間関係）』科目というのは、「学生必携」によると、「人間は如何なるものか、如何なる可能性を有し、如何なる方面の成長発達を遂げる事に依って円満な人格者となり得るか、家庭に於いて学校に於いての対人関係、結婚に関しての人間関係、市民としての地域社会、共同社会に於ける人間関係、広く世界市民としての他国民、他民族間の関係等に就いて学ぶ。」と説明されている。

その他の特色としては、教師と学生の連絡を密にするアドバイザー・アドバイザー制度、オフィスアワーの実施、現在多くの大学で試みられているフレッシュマン・キャンプに相当する「ブレイデー」、学寮を希望しながら下宿生活を余儀なくされた学生に対する「ビッグシスター・リトルシスター」の制度など、昨今の大学大綱化の中で見直されている制度の多くが、この時点での本学の教育システムの中で構想され、実現されていたのである。女専時代からの歴史を持つ修養会（リトリート）、サマーキャンプも女子大学に継承された。

また、当時はまだ4年間大学生活を送るのは婚期に差し支えるとの考えが一般的であり、家計にとっても4年間の授業料負担は苦しかった。そこで、同志社女子大学は4年制大学でありながら、独自の「2年修了制度」も採用した。

5) デントン先生の功績

1888年に来日して以来60年、太平洋戦争の間も帰国せず女学校に在任したM・F・デントン（Mary Florence Denton）は、同志社にいる間、「校長」職に就くことは一度もなかった。しかし彼女は滞在期間の長さ、独特の個性、同志社女学校に対する思い入れという点で群を抜いていた。その影響力は、同志社大学における新島襄に匹敵するものがある。「世界で一番良い国は日本、日本で一番良いところは京都、京都で一番良い学校は同志社、同志社の中で一番良いところは女子部」という彼女の言葉から、彼女が同志社女学校をこよなく愛していたことが伺える。

M・F・デントンの功績は大きく三つに分けることができる。まずは、校地を拡張し校舎・学寮を建て、教育設備を整えるために、自らは清貧の生活をしながら巨額の寄付を集めたことである。具体的には、太平洋ウーマンズ・ボードに対して繰り返し募金の依頼をする、在外の

友人・知人に同志社の存在をアピールする、あるいは京都を訪ねる外国人を都ホテルに訪ね、構内のデントン・ハウスに招待して寄付を求めるなどし、静和館、ジェームズ館、家政館、平安寮、栄光館が建ち、しかも栄光館にはパイプオルガンが設置された。

第2にはピューリタンのキリスト教教育の徹底である。毎朝行われる礼拝を怠けて休もうとする生徒を隠れ場所に追いかけて礼拝出席を促すなどのエピソードは数限りない。彼女の信念に基づいた行動は叱られる者にとって「すがすがしい恐ろしさ」と感じられ、決して嫌みはなかったと印象づけられた。また過ちを詫びに行くと、すぐに許し美しい花を与えて帰したとのことである。

最後に、彼女は同性である女性に対して、決して卑屈にならず威厳を持ち、かつ積極的に社会と関わって生きる大切さを教えようとしたことである。